『埼玉大学紀要（教養学部）』第 55 巻第 1 号、2019 年

延長する意識？

Extended Consciousness?

星野 徹*
Toru HOSHINO

時間意識を巡るアトミズムと延長説という二つの説を対比することによって、時間の中における意識のあり方について解明することを目指す。第Ⅰ節では、時間的に延長する知覚経験が隣り合う知覚経験と一部重なり合うことによって意識の流れが構成されるとする説を批判的に検討する。第Ⅱ節では瞬間の知覚内容はコンテクストに依存するとする延長説を検討した上で、それが意識の実体化を伴うことを明らかにする。第Ⅲ節では意識を実体と見なす発想や意識の流れという比喩を捨てた後に残るアトミズム的意識像と延長説的意識像を対照させる。延長説が成立するためには、瞬間的な知覚経験を総合する高階の知覚を想定するか、瞬間的な知覚経験の存在を否定するかいずれかを選ぶ以外にはないということが明らかにされる。前者は一種のアトミズムに、後者は持続する知覚主体の否定へと行き着くはずである。
キーワード：延長説、アトミズム、把持、見かけの現在、意識の流れ

Ⅰ　アトミズム vs. 延長説

私たちは変化を知覚することができる。雲が東の方角へ流れて行くのが見え、サイレンの音がだんだん大きくなるのが聞こえ、首筋を汗が流れ落ちて行くのが感じられる。こうした変化を知覚することがでるためには私たちの意識には一定の時間幅を持った世界の状態が姿を現しているのでなければならないように思われる。変化が生じるには時間の経過が必要であるからである。変化を知覚するとき、私たちは瞬間的な世界ではなく時間的幅を持った世界を知覚しているのである。しかし、時間的幅を持った世界を知覚するとはどのようなことなのか必ずしも明確であるわけではない。たとえばジェイムズの『心理学原理』の有名な一節はどのように解釈されるべきなのだろうか。

> 私たちの時間知覚の構成単位は、船首と船尾、すなわち前方と後方の端を持つ持続(duration)なのである。一方の端から他方の端への継起(succession)関係が知覚されるのはこの持続ブロック(duration-block)の部分としてのみなのである。私たちは始めに一方の端を感じた後に他方の端を感じ、それらの継起から時間の間隔を推論するというわけではない。私たちは時間の間隔を全体として、二つの端がそこに組み込まれているものとして感じているように思われる(James, 1950, pp. 609-610)。

* ほしの・とおる、埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授、哲学

時間知覚の構成単位は瞬間ではなく持続であるとはどのような意味なのだろうか。私たちの知覚経験は一定の時間幅を持ったブロックによって構成されているということだろうか。それとも各時点における知覚経験において一定の時間幅を持った世界が表象されているということだろうか。

ジェイムズは同じ箇所で時間知覚を馬の鞍に乗って過去と未来の両方向を眺めることにたとえている。こうした馬の鞍の比喩を考慮に入れれば、ジェイムズの念頭にあったのは後者、すなわち、瞬間の意識において幅を持った時間が表象されるという知覚モデルであったと見なすのが妥当であるように思われる。

知覚刺激 A, B, C, D ,E がこの順序で、等間隔で与えられるとしよう。また、時間知覚を構成する持続ブロック――ジェイムズはこれを同時代の心理学者クレイにならって「見かけの現在(specious present)」と呼ぶ――の容量がちょうど刺激三つ分だとすればば、たとえば C が終わる瞬間における知覚内容は、未来への視線を無視すれば(A B C)、D が終わる瞬間の知覚内容は(B C D)、E が終わる瞬間の知覚内容は(C D E)ということにそれぞれなるだろう。ジェイムズが主張するように「私たちは時間の間隔を全体として知覚している」のならば、A, B, C はいずれも知覚的に現前しているのである。しかしそれらは一つの瞬間の意識に現前しているにもかかわらず、同時に生起するものとしてではなく A, B, C という順番で継起するものとして現前しているのでなければならない。A, B, C が同時に生起するものとして現前してしまったのではそもそも変化の知覚が成立しないからである。そこで、時間の前後関係を矢印(→)で示すとすれば、みかけの現在の内容は(A→B→C)、(B→C→D)、(C→D→E)と表記されることになるだろう。瞬間において変化の知覚が生じているのである[1]。

ジェイムズに代表される説を「アトミズム」と呼ぶことにしよう。ラシュブルック-クーパーは「アトミズム」を時間的に延長した対象の知覚は瞬間的になされると主張する説を指す術語として使用しているが(Rashbrook-Cooper, 2017)、本稿においてはそれに加えてさらに次の二つの特徴を時間意識について認める説を「アトミズム」と呼ぶことにしたい。アトミズムによれば、知覚経験は瞬間的な知覚経験の集積によって構成される。意識の流れの基本的構成単位は瞬間的な意識なのである。また、ある人が一定時間においてどのような知覚経験を持つかは、その人が各瞬間においてどのような知覚経験を持つかによって決定され、説明されるとアトミズムは主張する。たとえば、時刻 t_1 から t_5 にかけての知覚経験のあり方は、t_1~t_5 間の各瞬間における知覚経験のあり方によって決まるのである。したがって、ある人がある時間においてどのような知覚経験を持っているかを知るには、その人の各瞬間における知覚経験がいかなるものであるかを知れば良いのである。アトミズムは意識の流れの構成原理に関する一つの存在論的立場であると同時に、流れの意識ついての一つの認識論的立場でもある[2]。

ラシュブルック-クーパーはアトミストとしてフッサールの名を挙げているが、フッサールはこうした狭義のアトミストでもあるように思われる。フッサールは刺激 C が与えられた瞬間に、それ以前の刺激 A, B と合わせて A B C が連続的に知覚されると考えているわけではない。C は原印象と

[1] ジェイムズ自身が持続の知覚をこのように図式化しているわけではない。また、時間が連続的であるとすれば、見かけの現在の内容も刻々と連続的に変容することだろう。
[2] 以上はソテリオウ(Soteriou, 2013, pp. 96-97)による定式化を改変したものある。ただし、ソテリオウは「アトミズム」という呼称を用いているわけではない。

して現前するが、A と B は原印象とも、想起の対象となる記憶とも、電話番号を一時的に覚えておく場合のような作業記憶とも異なった仕方で、意識の内に一時的にとどめおかれているのである。フッサールはこうした特殊な記憶を「第一次記憶」あるいは「把持(Retention)」と呼んでいる。把持を(')で、二重の把持を(")で表すとすれば、刺激 C が終了した瞬間の意識内容は(A"B' C)ということになるだろう。そして、意識の流れはこうした原印象と把持の系列が繰り返されることによって構成されて行くのである。(A"B'C)の次には(B"C'D)、その次には(C"D'E)というように（フッサール、2016）[3]。

ジェイムズやフッサールに代表されるアトミズムに対して、時間経験は点的ではなく時間的に延長していると考える「延長説(extensionalism)」と呼ばれる説が近年提唱され、支持者を増やしている。延長主義の先駆と見なされているフォスターの説は次のようなものである（Foster, 1991, pp. 246-250）。

再び、同じ時間的長さの音刺激 A, B, C, D, E が間を置かずにこの順に与えられたとしよう。フォスターもジェイムズと同じように経験内容は瞬間的ではなく一定の時間幅を持つと考える。そこで、見かけの現在の時間容量が音刺激三つ分だとすれば、C が鳴り終えた時点における意識内容はやはり(A→ B→ C)となることだろう。そしてそれらは(A→B→C)、(B→C→D)、(C→ D→E)の順に変遷して行くと考えられる。ここまでは、ジェイムズと同じである。しかし、これでは経験内容が重複してしまうのではないだろうか。B と D は 2 度、C は 3 度聞こえてくることになってしまうのではないだろうか。B は最初の経験と 2 番目の経験に、D は 2 番目の経験と 3 番目の経験に、そして C は 3 つの経験すべてに現れているからである。こうした疑問を提示した後、フォスターは、内容重複の問題を解決するには経験自体が部分的に重複していると考えれば良いと提案する。2 度現れるように見える B も D も、3 度現れるように見える C も、実際は部分的に重なり合う経験の同一の部分なのである。それらは経験の同一の部分であるゆえ、同じような音が繰り返し聞こえてくるといった現象が生じることはないのである。こうして、時間経験は時間的に延長していて、さらに、部分的に重複していると考えれば、C が 3 回聞こえると考える必要もなくなるだろう。C が聞こえるという経験が 3 つあるわけではないからである。フォスターによればこの場合、C という同一の内容を持った 3 つの経験が存在するのではなく、C という同一の内容からなる 1 つの経験部分が持続的に存在するのである。

フォスター説を踏襲したデイントンが後にこうした説を「延長説」と呼ぶことになるのであるが(Dainton, 2014)[4]、しかし、フォスターの説はジェイムズ説といったいどこが違うのだろうか。延長説によれば、時間経験は本質的に時間的に延長しているという。それでは、たとえば、(A→B→C)という内容を持つ経験はどれほどの時間続くのだろうか。

それぞれの音刺激は x 秒続くとしよう。A 音の開始から C 音の終了までの時間を 3x 秒となるだろう。(A→B→C)という内容の知覚経験もおおよそ 3x 秒続くのだろうか。すると、B 音の開始から

[3] 持続の知覚については以前論じたことがある（星野、2006）。そこでは変化の知覚のためには知覚対象と知覚経験双方の把持が必要であると論じられているが、把持の内部構造については、アトミズムと延長説を巡る本稿の議論には関わりがないので割愛する。

[4] デイントンの説についてより詳しくは Dainton(2000)を参照されたい。そこでもフォスターの説が紹介され、擁護されているが、まだ「延長説」と呼ばれてはいない。

D 音の終了までの時間も、C 音の開始から E 音の終了までの時間も 3x 秒なので、次の(B→C→D)も、そしてその次の(C→D→E)もそれぞれ 3x 秒間続くことになるだろう。しかしこれでは知覚経験が外界の変化に追いつけなくなってしまう。たとえば、D が始まってから次の E が始まるまでの時間は x 秒に過ぎないのに、D が聞こえ始めてから次の E が聞こえ始めるまでに 3x 秒かかってしまうことになるからである。(A→B→C)という内容の経験は、あるいはフォスターの言い方にならえば、(A→B→ C)からなる経験は瞬間的でなければならないのである。これは時間が連続的であるならば当然のことである。世界の状態は刻々と変化し続ける。そうした変化を捉える私たちの知覚経験のあり方も刻々と変化し続けるだろう。絶えず変化を続ける世界において同一の内容を持った経験が持続することなどあり得ないのである。フォスターにおいても瞬間において一定の時間幅を持った外界のあり方が経験されていることに変わりはないのである。さらにまた、フォスターもデイントンも部分が重なり合う経験の連鎖によって意識の流れが構成されて行くと考えている。この点においても、原印象と把持の連鎖によって意識の流れが構成されるとするフッサール説と違いはないように思われる。

延長説が現在多くの哲学者に支持されている一つの理由として、知覚経験は知覚される対象と時間的な性質を共有していなければならないという常識的な説がアトミズムと相容れないように思われるということが挙げられるかもしれない。時計の秒針が文字盤を一周するところを眺めている場合を考えてみよう。秒針が一周するのには 60 秒かかる。秒針が一周する様子を見るには 60 秒間秒針の動きを見続けなければならない。それゆえ、秒針が一周する様子を見ている人の知覚経験も 60 秒間続くだろう。こうした当たり前のことが、アトミズムが正しければ短い時間間隔においては成り立たなくなってしまうように思われるのである。アトミズムによれば瞬間的な意識に時間幅を持った外界の姿が現れることになるからである。しかしこうした疑念は見かけの現在に対する誤解に基づくものであるように思われる。

先ほどの音の例において見かけの現在は 3x 秒であるということになるが、それは 3x 秒間の出来事の知覚が瞬間的に生じるということを意味するわけではない。3x 秒間の音列を知覚するには 3x 秒の間音を聞き続けなければならない。A, B, C を聞き続けている人の見かけの現在に A の最初の部分が姿を現してから C の最後の部分が見かけの現在に収まるまでの経過時間はちょうど 3x 秒であることだろう。3x 秒間の出来事を知覚するにはやはり 3x 秒かかるのである。ただ、3x 秒聞き続けた結果として、3x 秒後の意識に 3x 秒間の出来事の表象(A→B→C)が、またフッサールによれば(A” B’ C)が生み出されるのである。

見かけの現在とは関わりがない、より長い時間の知覚経験においても似たような事態が生じている。60 秒間の秒針の動きを知覚するためには 60 秒間秒針を見続けなければならないが、60 秒経過したという感覚は瞬間的に生じる。60 秒間秒針の動きを見続けたがゆえに、60 秒後に、秒針を見始めてから 60 秒経過したという感覚が生じるのである。

Ⅱ　もう一つの延長説

延長説にはフォスターやデイントンとは異なったタイプのものがある。ソテリオウ(Soteriou, 2013, chap. 4)やフィリップス(Phillips, 2014)の説がそれである。そして、こちらは真の意味での延長説の名に値する説である。ソテリオウの説を検討してみよう。

ソテリオウによれば、私たちは持続する対象の知覚に関して二つの信念を持っているという。一つは(a)私たちが一定の時間――たとえば t1 から tn――の間持続している対象を知覚するとき、私たちは対象の持続時間と同じ時間――すなわち t1 から tn――の間、その対象に気づいているという信念である。60 秒間の出来事の知覚経験は 60 秒間続き、1 秒間の出来事の知覚経験は 1 秒間続くということである。もう一つは(b)知覚者が一定の時間の間一定の意識状態にあるということは、知覚者が各瞬間においてそうした意識状態にあるということによって決定され、説明されるという信念である。ある人が一日中続く歯痛に悩まされているとすれば、それは各瞬間においてその人に歯痛が生じているからであるというわけである。

(a)と(b)はいずれも自明のことのように思われるかもしれない。しかし、実は二つの間には緊張関係が生じる場合があるとソテリオウは言う。ソテリオウは瞬間的出来事の知覚を例にそのことを説明している。ソテリオウが取り上げていのは物が突然消えてなくなることを知覚するという場合であるが、物が突然消えてなくなるという想定は現実的ではないので、物の状態が突然変化するという例で考えてみることにしよう。

白い壁に赤い照明が当てられたとしよう。それまで白かった壁が突然赤くなるのである。そのようなことが生じれば、壁を見ている人はすぐに色の変化に気づくことだろう。瞬間的な出来事を視覚的に知覚するためには一定の時間――t1~tn――持続している対象を見る必要があるだろう。壁の色が白から赤に変わる瞬間だけ壁を見るということなどできないし、壁の色が白から赤に変わるためには壁の方も一定の時間持続的に存在している必要があるからである。すると、(a)により、時刻 t1 から tn にかけて持続的に存在する壁を知覚するためには、t1 から tn にかけて壁を見続ける必要があることになる。ところが、t1~tn の間のどの瞬間においても白い壁が見えかつ赤い壁が見えるといった状況に知覚者があることはないように思われる。知覚者は、白い壁が見えているか、赤い壁が見えているか 2 つに 1 つであるように思われる。すると、(b)により、白い状態から赤い状態に至る壁の持続的ありかたを私たちが知覚しているような時間帯などないということになる。なぜなら、(b)が主張するように、一定時間にわたる意識のあり方が時間を構成する瞬間の意識のあり方によって決まるとすれば、壁が白く見えかつ赤く見えているような瞬間がどこにもない場合、それらの瞬間によって構成される時間のうちにおいても壁が白く見えかつ赤く見えるような時間帯などどこにもないということになるからである。しかし、それでは壁が白から赤に変わったことを私たちは知覚できないということになってしまうのではないだろうか。壁が白から赤に変わったことを知覚するとは、壁が白い状態と壁が赤い状態双方を何らかの仕方で知覚することであるように思われるからである。

こうしたパズルに対して、アトミストならばもちろん(a)を否定するだろう。アトミズムによれば、時刻 t1 と tn の間隔が十分に短ければ、瞬間的な意識の見かけの現在に t1 における壁と tn における壁が共に含まれることになるからである。白い壁から赤い壁への変化が t1 と tn の間に生じたとすれ

ば、白い壁と赤い壁がともに見かけの現在の内容に含まれる瞬間が必ずあるのであり、それゆえ、壁の色が白から赤に変わる瞬間を知覚する瞬間が必ずあるのである。

これに対して、ソテリオウは(b)を否定することを選択する。x 秒間の出来事の知覚経験は x 秒間延長するという延長説を支持し、持続的な意識の内容は持続の各瞬間における意識の内容によって決まるというアトミストの説を否定するのである。私たちは特定の瞬間においてどのような意識内容を持つかという問いには答えることができない。各瞬間における意識内容はその瞬間を含む持続的な意識内容によって決まるのである。さらに、ソテリオウによれば、各瞬間における意識内容はコンテクストに依存する。同一の瞬間における意識内容であっても、意識をどの時間的幅においてとらえるかによって内容が変わってくるというのである。壁の色変化の場合次のようなことになるだろう。

時刻 t3 に壁が白から赤に変わったとしよう。私が壁を t1 から t5 にかけて見続けているとしよう。私は t3 において何を知覚しているのだろうか。私には t1 から t3 にかけてずっと白い壁が見えていたことだろう。したがって t1 から t3 の間のどの瞬間においても私には白い壁が見えていたことになるだろう。私の意識を t1~t3 の範囲でとらえるならば t3 において私には白い壁が見えていたのである。t3 から t5 にかけての私の意識のあり方を考えてみることもできるだろう。この間中私にはずっと赤い壁が見えていたはずなので、t3 においても私には赤い壁が見えていたのである。t3 を挟んだ時間における私の意識について考えてみることもできる。t2~t4 にかけて私には白い壁と赤い壁が見えていた。したがって、私には t3 において壁の色が白から赤に変わるのが知覚されたのである。

各瞬間の意識は確定した内容を持つわけではなく、その瞬間をどのような時間帯に属すると見なすかによって変わってくるというソテリオウの説は奇妙なものに思われるかもしれない。特に、意識内容が事後的に変化するとすればそれはかなりミステリアスなことではないだろうか。しかも、こうしたことは仮現運動のような特殊な場合に限らず、日常的な知覚経験において常に生じているというのである。

こうしたことが生じるのは、ソテリオウによれば意識は独特のあり方をしているからである。私たちの意識には様々な出来事が生じている。壁の色が変わったのが見え、車が動き出すのが見え、メロディーが流れるのが聞こえている。私に今赤い壁が見えているのは先ほど壁の色が白から赤に変わったことに気づいたからである。私にドの音が聞こえているのは、先ほどドの音が鳴り始めたことに気づいたからである。こうして私の意識に生じた出来事の種類によってその後の私の意識内容が決まってくる。しかし、それと同時に、先ほど生じた心的出来事がどのような種類の出来事であるかということはその後の意識のあり方によって確定するのである。私には先ほどから赤い壁が見えているがゆえに先ほどの出来事は壁の色が赤に変わったことに気づくという出来事であったのであり、私に今ドの音が聞こえているがゆえに先ほどの出来事はドの音が聞こえ始めたという出来事であったのである。こうして、心的出来事とその後に続く心的状態の間には互いが互いの種類を決定し合うという相互依存の関係が成り立っている。これが瞬間の意識内容が後続の意識内容によって事後的に決まる理由である。

ソテリオウはここに意識の特殊性を見て取っている。しかし、類似のことは物理的な対象につい

ても生じているように思われる。壁の色の変化の知覚ではなく、壁の色の変化そのものについて考えてみよう。

t3 において白い壁が赤くなったとしよう。t3 において壁は何色をしていたのだろうか。白だろうか赤だろうか。t3 において壁には色はないのだろうか。それとも、壁そのものがないのだろうか。持続時間ゼロの瞬間に何かがあるというのがそもそもおかしなことなのではないだろうか。ここでも、壁の色の知覚と同じことが言えるように思われる。t1~t3 にかけて壁はずっと白い。どの瞬間においても壁は白いのであるから t3 においても壁は白い。t3~t5 における壁はと言えば、どの瞬間においても壁は赤い色をしている。だから壁は t3 においても赤い。t3 を挟んだ時間帯の壁の色について言えば、t3 以前は壁は白くて t3 以降は壁は赤い。t3 はちょうど白と赤の時間的な境界である。t3 において壁は白いと見なせば、t3 は壁が白い時間帯の最後の瞬間ということになり、壁が赤い時間帯に最初の瞬間は存在しないことになる。t3 において壁が赤いと見なせば、t3 は壁が赤い時間帯の最初の瞬間ということになり、壁が白い時間帯に最後の瞬間は存在しないことになる。時刻 t3 において壁の色が白から赤に変わるとはそのようなことである。意識内容の場合と同じように、瞬間における壁の状態は前後の壁の状態によって決まるのである。ちなみに、t1~t5 の間中壁は存在しているので、t3 という幅ゼロの瞬間においてもやはり壁は存在しているのである。

以上は変化の存在を否定するゼノンによる飛ぶ矢のパラドクスが私たちに与えてくれた教訓である。飛んでいる矢はどの瞬間においても自分と等しい空間を占めているので、時間が瞬間からなるとすれば飛ぶ矢は飛ばないことになるとゼノンは言う。ゼノンに対しては瞬間 t における矢の状態は前後における矢の状態によって決まると答えるべきである。t の前後の期間、矢が同じ場所にとどまっているならば、t においても矢は同じ場所にとどまっているのであり、そうでなければ t において矢は十分と等しい空間を通過しているのである。そして、t において矢が自分と等しい空間を通過するとは、たとえば t において矢の先端が 100m 地点にあるとすれば、t とは矢の先端が 100m 地点より前の領域にある時間帯の最後の瞬間とみなされるか、もしくは、矢の先端が 100m 以降の領域にある最初の瞬間とみなされるかいずれかであるということである[5]。

t3 における壁の色が t3 以降における壁の色によって決まると言っても、ここで、t3 以降の壁の色が t3 における壁の色に因果的に作用するといういわゆる逆向き因果が生じているわけではないということに注意しておきたい。物の空間的性質についても同じことが言えるからである。赤と白に塗り分けられた壁の赤と白の境目は何色をしているのだろうという問いに対しても同じ仕方で答えることができる。空間的な幅を持たない境界自体が色を持つということは考えられない。境界の色と言われるものは周りを取り囲む領域が何色をしているかということによって決まる。より正確に言えば、赤と白の境界は赤の領域の最先端部と見なされるか、白の領域の最先端部と見なされるかいずれかであるということである。そじて、境界が赤の領域に属するとすれば白の領域に最先端部はないことになるし、境界が白の領域に属するとすれば赤の領域に最先端部はないことになる。これは面のない境界は存在しないという自明の事実に由来する。そして、ゼノンは同じことが空間だけではなく瞬間と持続の関係においても成立していると言いたかったのである。ソテリオウ説も、物

[5] ゼノンのパラドクスについては星野(1995)を参照されたい。

的対象だけではなく意識においても同種の関係が成立していると主張しているものとして解釈することができるかもしれない。

ところで、ある瞬間における意識の内容はその後の意識内容によって決まるというときの「後の意識」と何だろうか。単に次の時間に存在する意識という意味ではないだろう。そのような意識は人間の数だけ数十億存在する。「後の意識」とは未来におけるこの意識のことである以外にはないだろう。数的に同一の意識が持続的に存在していて、その内容が外界の変化に対応して刻々と移り変わって行く、ソテリオウはこうした意識像を前提としているように思われる。内容の変化を通じて同一のままにとどまる変化の基体としての意識が存在しているのでない限り、意識内容が時々刻々と変化して行くにもかかわらず一つの時間的に延長する経験があり続け、さらには、瞬間の意識内容が後続の意識内容によって決定されるという説が意味を持つことはないからである。ソテリオウの延長説は意識を実体化していると言ってもよいだろう。

意識の実体化とは次のような意味である。知覚経験や感覚経験には主体がある。私の頭痛は他の誰にも感じられないし、他人の視覚経験を私が共有することはできない。私が他人とともにすることができるのは視覚経験ではなく、視覚対象である。他人と私は同じ対象を見ることはできる。しかし、それらは別個の経験である。私の頭痛や私の視覚経験は経験の主体としての私だけに属するものである。昨日の頭痛も今日の頭痛もともに同じ私に属するという意味において私の頭痛なのである。こうした事実を意識の実体説はそれぞれの主体が個別の意識を持っているということによって説明する。私には私独自の意識があるのである。さらに、私の意識は主体としての私とは異なる通時的同一性の基準を持っている。現在の私の聴覚経験と昨日の私の聴覚経験は同じ主体の経験であるにもかかわらず数的に別個の経験であるからである。昨日から今日にかけて同じ主体が持続的に存在し続けてはいても、主体の持つ意識は数的に異なっているのである。また、内容の質的同一性によって意識の同一性が決まるわけでもない。現在の私の聴覚経験は 1 秒前の私の聴覚経験と聞こえている音の高さは違っていても同じ経験の部分であり、さらに 1,5 秒前の静寂の経験とさえ同一の経験の部分であると言われる一方、昨日の私の聴覚経験は現在の私の聴覚経験の内容と質的に違いはなくとも異なった経験に属すると見なされるからである。知覚経験は独自の同一性基準を持つのである。

外界の変化にはもちろん変化の基体がある。変化とは何かにおいて生じるのであり、その何かが変化の基体である。瞬間における壁の色は前後の色によって決定されると言えるのは、色の変化を通じて同一のまま存在し続ける壁があるからである。壁が色の変化の基体となっているのである。音のような変化の基体として物を想定することができないものの場合はどうだろうか。たとえば、連続的に大きさを変えて行く音のある瞬間の大きさは前後の音の大きさによって決まるというとき、音が生じている場所の同一性が前提されている。同じ場所に生じている音が変化して行くのである。あるいは、同一の場所に実現されている音性質が変化して行くのである。

基体としての意識という考えは、ヒュームが批判した意識を一種のスクリーンのようなものと見なす見方へと私たちを引き入れるだろう。壁の色の変化と平行してスクリーンに映し出される色も変化して行く。色の変化における壁の役割を色の知覚経験においては意識のスクリーンが担ってい

るのである。また、同じ場所の音の変化と平行して聴覚の振動板に響きわたる音も変化して行く。物理的な音の変化における空間的場所の役割を音の知覚経験においては聴覚的振動板が担っているのである。一つの意識が延長して存在するとは、外界を映し出す一つのスクリーンが持続的に存在するということなのである。スクリーンが入れ替われば、同じ主体が知覚し続けていても数的に異なった経験が存在することになるのだろう。

ところで、ソテリオウの説は、知覚の関係説と呼ばれる説を時間知覚にも拡張しようとする試みから発したものである。知覚の関係説とは知覚を知覚対象と知覚者の心理的関係と考える説である。壁が見えるとは壁と知覚者が視覚的関係にあるということであり、指先に壁が感じられるとは壁と知覚者が触覚的関係にあるということである。すると、時間知覚の関係説によれば、5 秒間の出来事を知覚するとは、知覚者が 5 秒間の持続と知覚的関係に立つことであるということになるだろう。知覚対象となる出来事の持続時間を知覚経験が共有すると言われるのも、こうした知覚の関係説に裏打ちされてのことなのである。そして、時間知覚における関係説は意識を基体と見る見方と相性が良い。5 秒間の壁の色の変化を知覚するとき、色の変化を通じて存在し続ける壁と知覚的関係にあるのは、知覚内容の変化を通じて存在し続ける変化の基体としての意識であると考えられるからである。壁の時間性質を壁と共有するのは内容の変化にもかかわらず 5 秒間持続し続ける意識そのものなのである。延長説の主張は、こうして、壁の持続のあり方とそれを知覚する意識のスクリーンの持続のあり方が同じ構造をしているということによって説明されるのである。

ただし、ソテリオウ自身が意識を変化の基体とみなしているわけではないということは付け加えておきたい。意識の流れはソテリオウにおいても、延長する意識同士が内容を共有することによって成立するというフォスターやデイントンと似たようなやり方で説明されている。しかし、主体の数的同一性とは別の仕方で、内容の質的同一性とも無縁の仕方で個別化される意識があるとすれば、その意識とは一種の実体以外の何ものでもないのではないだろうか。

意識の実体化を伴わないような仕方で延長説を再定式化することは果たして可能だろうか。その前にアトミズムについて改めて考えておきたい。

Ⅲ　瞬間的意識と持続する意識

アトミズムによれば意識の流れと呼ばれているものは瞬間的意識によって構成されている。そしてその瞬間的意識は時間幅を持った世界のあり方を表象している。世界だけではない。憂鬱さや喜びのような感情や思考や想起のような心的行為によってもたらされた心的状態についても私たちは意識することができる。私たちは自分の感情が変化し、自分の思考が移り変わって行く様子を知覚することができる。したがって、これらも瞬間的意識において表象されていると考えなければならないのである。

アトミズムに対する疑問として最も深刻なのは、瞬間的な意識などあるのだろうかというというものであるように思われる。持続時間ゼロの瞬間だけに存在し、さらに、時間的幅を持った世界や自己のあり方を表象する意識などというものがあり得るのだろうか。さらに、アトミズムによれば

意識の流れはこうした瞬間的意識によって構成されるのだという。瞬間的な壁など存在しない。あるのは一定の時間にわたって持続する壁だけである。そして、その壁の瞬間における状態は瞬間を取り巻く前後の壁の状態によって決まる。持続する壁があるゆえ、その壁の瞬間的状態が決まるのである。延長説が主張するように、数的に同一の意識が持続的に存在しているとすれば、その意識の瞬間におけるあり方を問うことができる。ところがアトミストは延長説を否定するのである。また、一つの意識が存在するとは意識が生成することであると考えても各瞬間におけるそのあり方を問うことができる。しかし、アトミストは、意識の流れと言われているものは、実は瞬間的に存在する時間的アトムによって構成されたものだと考えているのである。時間的アトムとしての意識とはどのようなものなのだろうか。

意識のあり方は脳のあり方に付随すると信じられている。意識は脳によって生み出され、あるいは実現されていると信じられている。脳は持続的に存在する物体である。したがって、瞬間的な脳状態というものはあるし、瞬間的な脳状態によって生み出され、あるいは実現される意識というものもあることになるだろう。アトミズムの瞬間的な意識とは瞬間的な脳状態によって生み出され、あるいは実現される意識のことだと考えられるのではないだろうか。しかし、脳状態によって意識は生み出され、あるいは実現されるとしても、それではどこにそれは生み出され、どこにおいてそれは実現されるのだろうか。ちょうど、音がそこにおいて生じるところの空間的場所のように、意識がそこにおいて生み出され、あるいは実現されているような持続的に存在する何かがあるとすれば、そこにおける瞬間的な意識のあり方について問うことができるだろう。より正確に言えば、アトミズムのいう瞬間的な意識とは、持続的に存在するものの瞬間的な状態とみなされることになるだろう。その瞬間的な状態が時間幅を持った世界のあり方を表象するところの持続的存在があるすればそれは一体何だろうか。それはもちろん知覚経験の主体としての自己である。持続的に存在する知覚経験の主体があるゆえ、その瞬間的なあり方としての瞬間的意識があり得るのである。

アトミズムとは、持続する意識、すなわち意識の流れは、持続を持たない瞬間的意識によって構成されていると主張する説であるとすれば、アトミズムは誤った説である。それによって他の何かが構成されるような瞬間的意識は存在しない。「意識の流れ」という使い古された比喩は時間意識の問題を考える際の障害となっているように思われる。延長説における「知覚経験の数的同一性」のように、意識を基体とみなすようなこうした物言いを取り去ってしまえば、アトミズムとは、知覚経験の主体は各瞬間において確定した状態にあり、その状態は時間幅を持った世界の状態を表象していること、さらに、知覚主体の一定時間におけるあり方は同じ主体の各瞬間の状態によって決定されること、以上を主張する説であるということになるだろう。

ここで再び音の知覚を例に考えてみよう。静寂の後に、A, B, C の音がこの順番で生じたとしよう。それぞれの音の持続時間を x 秒、見かけの現在を 3x 秒としよう。静寂をΦで表すことにすれば、A が響き始めてから C が鳴り止むまでの 3x 秒間における知覚主体の知覚内容の変遷は、ジェイムズ流のアトミズムによれば次のようになる。(Φ→Φ→A) → (Φ→A→B) →(A→B→C)。ここから二つのことを読み取ることができるように思われる。一つは、知覚主体はどの瞬間においても変化を知覚しているということである。C が鳴り止んだ瞬間に知覚主体は(A→B→C)を知覚しているので

ある。ただし、先に述べたように、変化の知覚が瞬間的に生成するわけではない。(A→B→C)が生じるには A が聞こえ始めてから 3x 秒経過しなければならないのである。二つ目は、各瞬間における知覚主体の状態を包括する高階の知覚状態のようなものはないということである。最初に(Φ→Φ→A)が知覚され、次いで(Φ→A→B)が、その次には(A→B→C)が、というように順番に知覚経験が推移して行くのであるが、さらに、それに加えて、最初に(Φ→Φ→A)が知覚され、次いで(Φ→A→B)が、その次には(A→B→C)が知覚されているということが知覚されているわけではない。つまり、((Φ→Φ→A)→(Φ→A→B)→(A→B→C))という内容の知覚経験は存在しないのである。したがって、フォスターやデイントンが懸念したような内容重複問題が生じることはない。(A→B→C)が生じるためには A が聞こえ始めてから 3x 秒経過しなければならないとしても、A の音が 3x 秒間鳴り続けていたものとして表象されているわけではない。A の音全体が見かけの現在に含まれているどの瞬間においても A の音は x 秒間続く音として知覚されているのである。直前の(Φ→A→B)もその前の(Φ→Φ→A)も(A→B→C)が生じる時点では知覚経験の主体からいわばはじき出されているからである。それゆえ、知覚主体の一定時間におけるあり方は同じ主体の各瞬間におけるあり方によって決定されるとは、単に前者が後者に付随するという意味ではない。それは、知覚経験の主体の持続的性質は同じ主体の瞬間的性質の和に過ぎないという意味である。また、同時に、知覚主体の持続的性質は同じ主体の瞬間的性質に還元可能でもある。アトミズムによれば、主体の各瞬間におけるあり方を知ることができれば主体の持続的あり方を知ることができるだけでなく、主体の持続的ありかたを知ることができれば主体の各瞬間におけるあり方についても知ることができるのである。

アトミストが考える私たちの知覚経験の変容のありかたと、物理的対象の変化、たとえば連続的に動いている時計の秒針の位置変化のあり方を比較してみよう。どの瞬間を切り取ってみても秒針は文字盤の特定の位置にいる。ある瞬間に秒針の先が 1 を指し示しているとしよう。秒針が動いているとは、その瞬間に秒針が 1 の位置を通過しているということである。それは、その瞬間は、秒針が 1 より前の領域にいる時間の最後か、1 以降の領域にいる時間の最初かどちらかであるということである。一方時計が止まっている場合は、その瞬間を含む一定の時間帯のどの瞬間においても秒針は 1 を指しているのである。前後の状態抜きの瞬間における秒針の位置などというものはあり得ないが、秒針の運動とは瞬間における秒針の状態の集合以外の何ものでもない。瞬間における秒針の状態は持続的な秒針のあり方を決定しているのである。こうした点において、秒針の運動と主体の知覚経験の変容は同じ構造をしていると言って良いだろう。

アトミズムにならって、アトミズムと対比的な仕方でソテリオウ流の延長説を定式化することができるだろう。それは次のようになるだろう。出来事の知覚は出来事の持続時間と同じ時間に渡って生じる。また、瞬間における知覚内容はコンテクストによって決まる。

通常、延長説に帰せられる知覚経験は時間的に延長しているという説はここからは排除されている。したがって、同一の知覚主体における知覚経験の数的同一性の問題が生じることはない。また、瞬間の知覚内容はコンテクストによって決まるとは、時間的に延長している意識の前後の状態によって決まるという意味ではなく、知覚経験の主体の前後のあり方によって決まるという意味であることになる。

それぞれ x 秒間持続する連続的音 A, B, C を知覚している者の 3x 秒間に渡る知覚内容は延長説に従えばどのように図式化されるだろうか。それは(A→B→C)と表されることだろう。3x 秒間の出来事は 3x 秒間に渡って知覚されるからである。しかし、それは 3x 秒の間のどの瞬間においても知覚主体は(A→B→C)という知覚内容を持っているということを意味するのだろうか。たとえば、A が鳴り続けている最初の x 秒間においても、A 音を聞いている私には(A→B→C)という知覚経験が生じているということなのだろうか。もちろんそのようなことはない。私に予知能力があるわけではない。延長説によれば x 秒間の出来事の知覚は x 秒間に渡って生じるとされているので、最初の x 秒間は(A)という状態に知覚主体はあるのでなければならないだろう。したがって、私は最初の x 秒間は(A)という状態にあるのである。私には最初の x 秒間には x 秒間続く A の音が聞こえているだけなのである。同様に、次の x 秒間には(B)、最後の x 秒間には(C)という状態に私はあることになるだろう。こうした問いは無限に繰り返すことができるだろう。そして、最初の x 秒間のどの瞬間においても A が、次の x 秒間のどの瞬間においても B が、そして、最後の x 秒間のどの瞬間においても C がそれぞれ私には聞こえているということになるだろう。それでは一体私はいつ(A→B→C)という状態にあるのだろうか。延長説による答えは再び 3x 秒間に渡って、というものである。A が知覚され、その次に B が知覚され、その次に C が知覚されることが、A の後に B が、B の後に C が生じることが知覚されることなのである。

一見するとこれは自明なことに思われるかもしれない。時計の秒針が文字盤を一周するところを知覚するとは、秒針が 1 のところを通過するところを知覚し、次に 2 のところを通過するところを知覚し、次に 3 のところを通過するところを知覚し等々を繰り返すことに他ならないのではないだろうか。実際、60 秒間に渡る知覚経験の場合はその通りであろう。しかし、ここで問題となっているのは、変化の知覚はいかにして可能かということである。秒針が動いて見えるためには、また、一続きのメロディーが聞こえるためには、私たちの瞬間における知覚経験はどのようなあり方をしているのでなければならないかということがアトミズムと延長説の間の争点なのである。

そこで、A の音が消え、B の音が聞こえ始めるという瞬間的な出来事の知覚について考えてみよう。この知覚経験はいつ生じるのだろうか。壁の色の変化の場合と同じような仕方で説明されることだろう。それは、A が消え、B が生じる瞬間、すなわち、A が響き始めてから x 秒後に生じるのである。しかし、延長説によれば、x 秒後に生じるこの知覚経験が、A が消え B が生じることの知覚経験であるということを知覚主体が知るのは後のことである。私たちは、今の自分の知覚内容について知ることはできないのである。

私たちは連続的な変化や突然の瞬間的な変化を知覚することができるだけではない。変化が生じていないということを知覚することもできる。壁の色が変わらずにいること、同じ音が鳴り続けていることを知覚することができる。A が鳴り続けていることの知覚は、x 秒間に渡って生じている。したがって、x 秒間のどの瞬間においても私には A の音が聞こえている。しかし、各瞬間における私の知覚は A 音が持続しているという知覚ではないはずである。延長説は知覚経験の時間的性質と知覚対象の時間的性質は同じであると考える。延長説によれば、瞬間における知覚内容は持続なき瞬間的な A 音の知覚でなければならないのである。音が持続するためには時間が必要であるのと同

じように、音の持続の知覚のためには知覚経験が持続することが必要なのである。各瞬間における持続なき A 音の知覚が集合して x 秒間に渡る A の流れの知覚となるのである。

こうして、延長説によれば知覚経験の変化は知覚対象の変化を忠実に映し出しているということになる。瞬間に変化は生じないように、瞬間において変化は知覚されない。また、x 秒の変化は x 秒に渡って知覚されるのである。

しかし、なぜ各瞬間における持続なしの A の知覚が集まると A の持続の知覚になるのだろうか。各瞬間における知覚には持続の知覚が伴わないのに、一定時間にわたってそうした知覚が続くと持続の知覚が生じるのはなぜだろうか。これは、ゼノンの問いである。瞬間において自らと同じ空間領域を占めている矢が飛ぶことができるのはなぜだろうかという問いと同じタイプの問いである。ここで、x 秒間 A が鳴り響いているのでどの瞬間においても A が鳴っていると言うことはできるし、x 秒間 A が聞こえているのでどの瞬間においても A が聞こえていると言うこともできる。x 秒間のどの瞬間においても A が鳴り響いていれば、A は x 秒間持続しているのであり、x 秒間のどの瞬間においても A が聞こえていれば A の聴覚経験は x 秒間続いているのである。しかし、知覚経験の場合はそれに加えて A の音が x 秒間鳴り響いていることが知覚されることになるのである。延長主義によれば、時間幅を持った知覚経験には、その時間を構成する各瞬間における知覚経験の総和以上のものが含まれるのである。瞬間においては知覚されない持続が、持続的経験においては知覚されるからである。

持続的経験のあり方が瞬間的経験のあり方に形而上学的にも説明的にも優先するという延長説の主張は、瞬間的意識状態は持続的意識状態のあり方によって決まるという主張に過ぎないと言われることがある。A が x 秒間に渡って持続的に聞こえているならば、その間のどの瞬間においても A の持続が知覚されていると言うべきなのだ、というように。実際、フィリップスは次のように述べている。バッターが o,5 秒間に渡ってボールの動きを経験しているならば、その間のどの瞬間においてもバッターはボールの動きを知覚している。その瞬間はボールの動きを知覚している時間帯に含まれているからである(Phillips, 2014, p. 152)。

しかし、これは変化の知覚を巡る問いに対する解答を放棄するようなものである。瞬間においてボールの動きが知覚されているためには私たちの瞬間における知覚経験はどのようなあり方をしていなければならないかという問いが残されるからである。アトミストは瞬間においてボールの動きが知覚されていることを認めた上で、瞬間における知覚経験のあり方を見かけの現在によって説明しようとしている。見かけの現在を放棄してしまった延長説はどのようにして瞬間における運動の知覚を説明するのだろうか。

以上のような延長説解釈が正しいとすれば、私たちの知覚経験は知覚対象となる出来事の時間的性質を写し取っているとは言っても、知覚対象と知覚経験の主体の時間を通じてのあり方はかなり異なっているということになるだろう。延長説が考える知覚経験の瞬間的あり方と時間を通じてのあり方の関係とは違って、知覚対象となる物の時間を通じてのあり方は各瞬間における物の状態の総和以外の何ものでもないからである。

ここで、先ほどの問いに戻ろう。なぜ持続の知覚を含まない各瞬間における知覚経験が集まると

持続の知覚になるのだろうか。時間幅を持った知覚経験の場合にも同じ問いが生じる。A の知覚経験の次に B の知覚経験が続き、その次に C の知覚経験が続くことがなぜ A, B, C が一続きのメロディーとして聞こえるという知覚経験となるのだろうか。こうした問いは延長説の精神を理解していないところから出てきた的外れな問いだと延長説の支持者は反論するかもしれない。延長説は、知覚経験は本質的に延長しているのであって瞬間から構成されているのではないと主張しているからである。しかし、それでもこの問いを回避することはできないだろう。延長説は、たとえば t1~t5 からなる一つの知覚経験の内に、t1~t3 からなる一つの知覚経験と t3~t5 からなるもう一つの知覚経験が含まれることも、また t3 における瞬間的知覚経験が含まれることも認めているからである。時間的全体と時間的部分や瞬間の関係はどのようになっているのか、延長説は説明しなければならないのである。

各瞬間の知覚経験を一つの持続する知覚経験へと総合し、また、二つの時間部分を一つの持続する知覚経験へと総合する作用が知覚主体において行われていると考えれば問いに答えることができるかもしれない。たとえば、連続的に生じる(A), (B), (C)が総合されて(A→B→C)となると考えれば良いからである。しかし、これではアトミズムの焼き直しである。一階の知覚経験(A), (B), (C)を知覚する高階の知覚経験が存在し、後者が前者を総合していると考えてしまえば、この説はアトミズムが考える知覚対象と知覚経験の関係をそのまま心的領域に移し替えたものに過ぎなくなってしまうからである。

瞬間的意識状態のあり方は単に確定していないのではなく、そのようなものは存在しないのだとしてしまえば良いのではないだろうか。私は持続的に存在しているように思われる。そして、その私には部屋の光景が見え続けていて、音楽が聞こえ続けているように思われる。今朝目覚めてからずっと風景が見え続けているという実感はないものの、少なくともこの数秒の間に限れば、机が連続的に見え、音楽が連続的に聞こえているという実感を私は持っている。ここ数秒間、知覚経験が継続しているならば、私は数秒の間のどの瞬間においても何かを知覚しているはずである。瞬間の意識状態などないとすれば、こうした実感は誤っているということになる。すると、持続的に存在する知覚経験の主体としての自己など存在しないということになるのだろうか。それとも、知覚経験の主体としての自己とは時間的な存在ではないということなのだろうか。自己が時間の中になければ瞬間における知覚経験のあり方などもないということになるだろう。瞬間とは表象内容の時間性質であって、知覚主体の瞬間的あり方などはないのである。これらは、いずれも興味深い仮説である。しかし、たとえ瞬間的な意識状態がないとしても問題が解消されるわけではない。時間部分と全体の間の問題は手つかずのまま残るからである。

結局のところ、変化の知覚を説明するための説としては、延長説は無効であるように思われる。私たちの視覚経験の時間を通じての変化のあり方は、物的対象の変化のあり方と異なっているわけではないように思われる。すると、時間を通じての変化のあり方は、知覚経験の場合も物の場合も、各瞬間、または各時間部分のあり方の総和以外のものではないということになるだろう。

ただし、延長説が説得力を持つような場合も確かにあるように思われる。それは変化の知覚ではなく意図的な思考の場合である。意図的に何かを考えるとき、私たちは常に自分が何を考えている

か知っている。思考の主題だけではなく、思考の内容についても常に私たちは意識している。こうした意図的思考に関しては、瞬間的思考状態が集まってまとまった思考になるなどということは考えられないことである。瞬間的思考とはどのようなものなのか想像してみることはできない。意図的思考は、延長説が知覚経験について述べたように、一定の時間に渡って展開しているのでなければならないように思われる。意図的思考の現象学といったものが考えられるとすればそれはどのようなものになるのだろうか。意図的思考のあり方と知覚経験のあり方はどのような関係にあるのだろうか。これらはこれからの検討課題である。

文献表

Arstila, V. and Lloyd, D. (eds.) (2014), *Subjective Time*, The MIT Press.

Dainton, B. (2000), *Stream of Consciousness*, Routledge.

Dainton, B. (2014), “The Phenomenal Continuum”, in Arstila, V. and Lloyd, D. (2014).

Foster, J. (1991), *The Immaterial Self*, Routledge.

James, W. (1950), *The Principles of Psychology*, vol. 1, Dover Publications.

Philipps, I. (2014), “The Temporal Structure of Experience”, in Aristila, V. and Lloyd, D. (2014).

Phillips, I. (ed.) (2017), *The Routledge Handbook of Philosophy of Temporal Experience*, Routledge.

Rashbrook-Cooper, O. (2017), “Atomism, Extensionalism and temporal presence”, in Phillips, I. (2017).

Soteriou, M. (2013), *The Mind’s Construction*, Oxford University Press.

エトムント・フッサール(2016), 『内的時間意識の現象学』、谷　徹訳、ちくま学芸文庫

星野　徹(1995), 「無限と瞬間」『埼玉大学紀要　教養学部』第 31 巻第 1 号

星野　徹(2006)、「持続の知覚」『埼玉大学紀要　教養学部』第 42 巻第 2 号